

Fast Life, Slow Life

村越 真

「マスコミにひっぱりだこ」
の日々。時にはslow downし
ないと体がもたない。忙しい
生活の中で、WOCの地図調
査は、最高の気分転換になっ
てしまった。

トランクーつで、カリフォ ルニアへ

ウィンドウズ2000のインスト
ール中に、バックアップデータの入
ったハードディスクもなぜかフォーマ
ットされてしまった。研究やオリエン
テーリング関係の作業中のファイルも全
て入ったハードディスクだった。目の
前で家が焼けてしまうようなショック
を感じた。失われたファイルのために、
これからどれだけの余計な仕事が必要
とされるのだろう。それを思うと気が
重くなる。

その反面、自分の蓄積全てが失われ
たことにさすががしさを感じている自
分もいたのは驚きだった。一代で大企
業を起こして億万長者になったところ
が、経済変化で一夜にして会社は倒産、
築き上げたものを全て失っても、西部
にいけばまた一旗上げるチャンスもあ
るだろうと、トランクーつ片手にコー
チに乗る、アメリカン・ドリームの主
人公気分だ。怪我にしろ、長年続いた
連覇のストップにしろ、後生大事にし
ていたものでも、失ってみたら意外と
たいしたことないという経験をしてい
たからこそ、こういう気分になったの
かもしれない。

体験は常に心の中に残っているが、
データとなる日誌も消えてしまったの
で、今回の連載は、これまでのように
逐次日付を追うという形ではなく、印
象に残った出来事に焦点を合わせて書
くことにする。

ジャムとslow life

実は人前で話しをすることがあまり
好きではない僕にとって大学での講義
は一種のストレスなのだが、全ての授
業がストレスというわけではなく、学
生に知識や技術を伝えることや、一緒
にいろいろな問題を考えることが楽し
みな授業もいくつかある。体育実技の
選択種目の一つとしてやっている「野
外運動」もその一つだ。この授業には、
僕のslow lifeの発想が丸ごと生かされ
ているといってもいい。4月下旬には
「野草のてんぷら」や草団子を食べた。
草団子を知らない学生はいないが、学
生にとって草団子なんて買うもの。そ
れが、自分の手で作れることは新鮮な
驚きようだ。結構インパクトを感じ
るらしい。そういう活動を楽しんでい
る学生の姿を見ると、こちらも楽しく
なる。

6月に行ったジャムづくりも同じだ。
もともと大学構内になっているヤマモ
モをとってきてジャムにするというの
が、この授業の核だったが、ヤマモモ
は年によって取れる取れないの差が大
きいので、最近ではりんごやオレンジ
を予め持ってこさせて、リスクヘッジ
している。それでもやはり、売ってい
ると同じようなジャムが自分の手で
いとも簡単にできてしまうのは驚きの
ような。

この授業でオリエンテーリングをし
て、学生が帰ってくるのを待っていた

時、近寄ってきた女子学生がいた。「先
生憶えていないでしょうけど、先生の
野外活動の授業を2年前とったもので
す」と彼女は名乗り、最近ジャムを作
ったのだと教えてくれた。僕の授業で
ジャムが簡単にできることだけでなく、
ジャムを作る時間の優雅さが印象的だ
だったので、自分でも作ってみたのだと
いう。こういうふうな深いところで受
講生に気づきを与えられる授業がで
きたことは、教員冥利につきる。

気分はブラックジャック

この二月の前半は、ファスト・ライ
フを突っ走ったという感があつた。6
月号のマガジンの編集の傍らJOAが
発行する諸規程集の編集作業をし、ま
た夏に遠征するユニバーとジュニア世
界選手権チームのための遠征ガイドを
編集し、さらには夏に出す予定の野外
活動の危険についての本の最終原稿を
仕上げている。大学では仕事、家に帰
ってからもオリエンテーリングの仕事、
しかも編集とチェックという知的喜び
の少ない仕事で、少なからず疲弊した。

「マスコミにひっぱりだこ」の状態
も続いた。雑誌の取材が4本、新聞が
一誌、テレビの撮影も3本。そのうち
1本はさすがに忙しくて、興味もわか
ない仕事なので断ってしまった。なか
でも5月11日は、10時から東京駅
のホテルのロビーで雑誌のインタビュー、
12時に丸の内方向音痴の人と
落ち合って、深川から浅草まで伊能忠



体育の授業で野草のてんぷらをつくる学生たち



方向音痴の人たちとTVの録画撮り。NHK放送技術研究
所前で

敬の足跡をたどり、その模様を取材され、その合間に1時間ほど抜け出して、別のテレビ番組の録画撮り。そうしてできたのが5月18日に放映された「週間子どもニュース」のなるほどどんぶりコーナーだった。

番組のときは今ひとつだったが、「伊能忠敬の足跡を訪ねて」は2重の意味で印象深かった。前半の深川では、方向音痴の人たちは、お約束のように地下鉄出口で反対方向に進んでしまい、また伊能先生の居宅の方に曲がる道の角でも散々迷っていた。そこで地図の読み方を教授。その中の一人が腕時計につけるコンパスを持っていたので、それを使って整置する方法や現在地をしっかりと確認し、またそれを分かりやすくするためのサムリーディングを教えた。一回教えたくらいじゃよくならないのが地図読みだけど、それでも言わなくちゃ絶対よくはならないからね。

別のテレビの録画撮りを終えて合流してみると、彼らは順調に歩いている。その中の一人が、「先生、地図っているんなことが分かるんですね」と言う。僕に教えられたとおりにやると地図がよく分かるというのだ。そして、こんな社会生活で大事なことを学校で教えてもらえないなんておかしいと言う。

彼女たちは、浅草寺の後の地図が分かりにくい部分もなんとか通過した。その先を確認している時、彼女は、「私たち、西に進むんですよね」と言った。「私、今生まれた初めて、東西南北で進む方向をいいました。」そう言って彼女は自分自身驚いたようだった。地図という絶対的な座標が設定された空間の上で方向を読み、整置によってそれをそのまま実際の空間に延長できると

いう経験をする
ことで、東西南北という基準軸を実際の空間にも延長して使えるようになるという体験は、彼女にとっても驚きだったようだが、地図に慣れ親しんだ僕にとっても、地図という道具のパワーを実感した瞬間だった。また自分のちょっとした地図読みのアドバイスに対

するこの結果には、気分は名医ブラックジャックであった。

その後念願の伊能先生の墓参。隣に師である高橋至時の墓がある。伊能忠敬は、遺言で師の墓の脇に葬られたのだ。至時の墓には「高橋君之墓」とあるのに、なぜか弟子である伊能忠敬の墓には「伊能先生之墓」とあるのがほほえましい。子どもニュースの最後のコメントはこの墓参の直後に取られたものだが、僕は感極まっていたので、あまりにまじめなコメントしかできなかった。

撮影も終了し、有楽町の国際フォーラムで懇親会。それまで走れなかったので、荷物を預けてそこまでランニングでいった。方向音痴の彼ら曰く、「先生は私たちの方向恩師です」。

体からのSOS

連休後も、そんなことでばたばたした日々が続いた。千葉で高校の地理教師をしている小林岳人氏のアレンジで、千葉県の高校地理教員に対してナビゲーションと読図の話をする事になった。学校で目的地に向かうための地図の読み方など習った人はいないのではないだろうか。地図を使うのは地理教育の基本なのだが、意外と現実と接点のある地図利用の話は地理教育では出てこないのだ。地図の新たな世界を知ってもらっただけでも意義のある研修会であった。

その週末は、合宿。追いつくトレーニングが多かったこの合宿はさすがにつらかった。そしてその翌週のある日、日常生活に対する気力が失せている自分に気づいた。そのままではうつ病になってしまうのではないかという恐怖

感さえあった。どうしようもない疲労感が感じられなかったが、これも体の上げた悲鳴の一種に違いない。「スロー・ダウンしよう！」たった1週間ほどだったが、その間は仕事も適当にし、追いつくトレーニングもせず、だらだら過ごした。

東京通い

5月後半はしょっちゅう東京に出かけた。木曜日に授業がない週が続いたので、東京で実験やら打ち合わせやらを入れた。当然水曜の夕方から東京にいて渋谷で走る。5月は常連並に練習に参加した。

28日は渋谷で走る会のメイングラウンドである織田フィールドで5000mの記録会。最近スピード練習をしていないので、17分が目標だったが、とんでもない。タイムは1年前の17'12に遠く及ばない17'34だった。だが、現状を知っていなければ改善の方向もつかめない。これが現実なら、それを乗り越える努力をするだけだ。それにこのタイムなら、次回17分を切っただけでも嬉しいじゃないか。

この週は週末もパークOの全日本大会のため東京へ。5000mで2分も差がつくのではパークOじゃ勝ち目がない、いやパークOだからこそ細かいテクニックが差を生むはずだ。結果はトップ松澤に1分近い差をつけられる大敗だったが、ついたタイム差は17分走って5000mのタイム差の半分だ。16'40で走れていれば、パークOでも充分トップが争っていたのだ。

翌日は東大会だったが、頑張りすぎが5月中旬の気力のなさを生んでいたことを反省し、参加は取りやめ。横浜で一人暮らしをしている93歳の祖父を訪れて、そこで一晩泊めてもらい、翌日はゆっくり清水に帰った。

翌6月8、9日の週末は作手で地図調査。GPS測位も含めた正確な原図での調査はストレスも少ない。そんな調査は仕事というよりもむしろ息抜きという側面が強い。一日の仕事が終わって、おいしいもの食べて、人類の知識が自分が今日一日動いた分増えたという感慨に浸りながらビールを飲んで、疲れるまで作図して、眠くなったら寝てしまう。こんな贅沢な時間はないなあ、と地図調査するたびに思う。ね、あなたも地図調査しませんか？